



堀田力さん **対談** 杉浦正健さん

助け合いの循環を生み出すために  
社会貢献活動が果たす役割と課題

ブームや勢いではなく、地道に“継続”してこそ真価を発揮するのが社会貢献活動である。また、それは特定の個人や団体が担うものではなく、この社会に生きるすべての人が参画することで、より充実したものになっていくことは間違いない。2010年から6年間にわたってAJOSCの会長を務められた堀田力さんから、昨年、たすきを託され、新会長に就任した杉浦正健さん。同い年で、ともに法律畑を歩まれ、さらにそれぞれが代表を務める団体で様々な活動に取り組まれているお二人に、社会貢献活動が果たす役割や今後の課題、遊技業界の社会貢献のあり方などについてお話しいただいた。

継続的な義援金募集活動や  
奨学金給付で被災者を支える

**杉浦** 以前、お目にかかったことがあるかもしれませんが、改めて本日はおいでくださり、ありがとうございます。

**堀田** こちらこそ、お招きいただき、ありがとうございます。

**杉浦** 堀田先生が会長をされているさわやか福祉財団は、募金活動を含め、東日本大震災の被災者支援を続けていらっしゃいます。また、昨年の熊本地震に際しても同様の活動をされています。昨夏、AJOSCでも熊本地震の緊急復興支援として、さわやか福祉財団に被災者の方々への義援金を寄託させていただきました。

**堀田** その節は、ありがとうございました。聞くところによりますと、杉浦会長も自ら財団を設立されて、高校生に奨学金を給付しているとか。

**杉浦** 国会議員を引退する直前、河川改修や道路拡張に伴い、先祖伝来の土地を売却しました。それを元手に、引退後、「杉浦ブラムチャリヤ」という一般財団法人を作り、地元の岡崎市及びその周辺にある高校

17校に対し、1校1名、月1万円を給付しています。また、東日本大震災の被災者支援ということでは、監事を務める全国青少年教化協議会の「あおぞら奨学基金」を通じて、石巻市の高校生10名に月1万円の奨学金を給付しています。毎年、報告書が送られてきますが、感謝を述べる文章を読むと、津波で親を失った子どもたちの境遇に涙が出ます。

**堀田** 東北の方々は、特に健気です。大人だけでなく、子どもたちも、つらいことや悲しいことを自分のなかに飲み込んでしまい、なかなか自分たちの望むことを言ってくれない。でも、そうした奨学金が、その子どもたちの成長にとって大きな要因になっているのは間違いない。感謝の文章というのは、大きな財産になりますね。

**杉浦** 進学にしろ、就職にしろ、しっかりとした夢を持っている子どもたちが多い。その子どもたちの将来が楽しみです。

**堀田** 被災地に行くところなのですが、一番感謝されているのが自衛隊。それから警察や消防、その次が







ボランティアですが、これには寄付金や奨学金も含まれます。こうしたお金は、受けた側の生き方を変えていく。自分のことだけ考えてはいけなくて、今度は自分も人のためになるようなことをしなくてはいけないと考えるようになります。そこが大きいと思います。

**杉浦** 奨学金ということ言えば、遊技業界では今度新たに「pp(パチンコ・パチスロ)奨学金」というものを立ち上げました。これはお客様の端玉を、この奨学金制度の趣旨に賛同いただける各ホールに設置する端玉募金箱に直接、ご寄付いただくものです。「社会福祉法人さほうと21」のご協力を得て、日本国内の学校に通う、18歳以上の成績優秀で研究内容に独自の視点があり、未来のビジョンを語る経済的な理由で進学や就学が困難な学生を対象に、月5万円の返済義務のない奨学金が供与されます。

### 民間団体だからこそできる 「必要なものを必要ところへ」

**堀田** 私は阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災、熊本地震とすべて被災地に入りましたが、震災直

後は寄付や義援金も集まり、大きな助け合いの動きが起こるのですが、そのうち同じ被災者であっても、様々な格差が生じ、いがみ合いのようなものが出てきています。これは原発の被害でも同じ。これは我々から見ると悲しい。あるいは、阪神淡路大震災は日本におけるボランティア元年と言われていますが、あのとき本当にたくさんのボランティアの方々が入ってくれましたが、時間がたつにつれて冷たくなってきた。東日本大震災でも同じような現象が起こりつつある。そうではなく、みんなが頑張っていて応援しているということを示したいし、被災者同士も支え合っていてほしい。だから、もう一息、AJOSCにも頑張ってもらい、支援活動を継続してほしいと思っています。

**杉浦** 熊本地震の報道などを見ても、阪神淡路大震災のときにできたボランティア団体や支援団体などが現地に入って様々な活動を展開しているようです。これは嬉しいことですね。

**堀田** あのときに助けてもらったから、今度は自分たちが助けてあげなくてはということで、援助された側が生き方を学んで、そうした活動を続けている。これはすばらしい循環だと思います。

**杉浦** それを民間の団体が行うからいいんですよね。役所が主体になると、どうしても一律になってしまう。だから格差も生じやすい。民間だと、本当に必要なところへ必要な支援をすることができる。

**堀田** 現場に行けばわかりますが、本当に必要とするところに必要な支援を振り向けるということが大事です。しかも、被災地では必要とされるものがどんどん変わっていく。最初は食べ物、そのうち同じ食べ物でも温かいものがほしいということになる。また、暖房が必要だから湯たんぽを送ってほしいと言われ、それを集めているうちに、もう湯たんぽは必要ないというように、ニーズがどんどん変わっていく。生活が再興する過程なので仕方ないことですが、それでもやはり一番必要とされるものを届けることが大事です。

**杉浦** 奨学金なども人生のある一定期間に過ぎないわけですが、人間が成長していくうえで一番大切な学生時代に、あのお金があったから助かったということになる。それもまた、必要とされるときに、必要なものをきちんと届けるということにつながるのでしょうか。

**堀田** ボランティアや奨学金に助けてもらったという人は、そのことを一生忘れません。そして、強い人間に育ちます。それは、人を信じられるから。学校でいじめがあったり、就職しても厳しいことがあったりしますが、そうした厳しさに耐えられる。どこかで困ったことがあっても、助けてくれる人がいるという実感は、生きる強さを生み出すのだと思います。ボランティア活動をしたことがあるという子どもも強い人に育つ。我々の調査でも、小中学校でボランティア活動を体験した子どもは、20歳になっても6~7割が続けている。そうでない子どもは、2割にも満たない。そういう結果を見ても、強い子どもたちだなと思います。

### 助け合いやふれあいのある 温かい社会を構築するために

**杉浦** 堀田先生のさわやか福祉財団は、全国規模で様々な活動を展開されているわけですね。

**堀田** ええ、私どもは「新しいふれあい社会の創造」を基本理念に掲げ、助け合いのある社会に変えていきたいという思いのもと、1991年にスタートしました。そうした思いに賛同する仲間たちが、いま、全国で頑張ってくれています。

**杉浦** 自助、公助、共助で言えば、共助の部分にあたるのだと思いますが、なかでも地域づくりに力を入れていると聞いております。

**堀田** 3年前から、助け合いによって各市区町村がしっかり支え合うような仕組みを作ろうということで働きかけをしています。私どもの財団では、5~6名の担当職員が全国約600カ所の市区町村を回っていますが、私も100回以上、全国にうかがいました。

**杉浦** そもそも、どういったことで地域づくりに目を向けられるようになったのですか。

**堀田** 2015年にスタートした改正介護保険制度がきっかけです。この制度によって、要支援者の訪問介護と通所介護が市区町村の事業になりました。超高齢化、少子化、核家族化がこのまま進めば、社会保障費が不足し、増税かサービスの大幅切り捨てにならざるを得ません。そこで、限られた社会保障費を有効に活用し、制度を持続可能にしようというのが新制度の狙いですが、専門性が必要な介護は専門事業者が支え、日常生活支援は、できるだけ住民やボランティアの主体的な助け合いによって支えていこうというものです。しかし、財源の有無とは関係なく、助け合いにはかけがえのない長所や効果があります。支え、支えられるとい





う互助の仕組みのなかで築かれる絆やふれあいは、より深い喜びや楽しみを生み出し、結果として介護予防につながったり、孤立した人々が地域で活躍する力にもなります。また、助け合いは障がいがある人でも、認知症の人でも、すべての人々が主体的に参加することができるものです。いわば介護保険の仕組みを使って、新しい地域づくりを進めようというものです。

**杉浦** 全国を飛び回っているなかで、特に気づかれたことなどあるのでしょうか。例えば、自治体の担当者などはどうでしょうか。

**堀田** お役人は、市民から見ると、どうしても上から目線に感じられる人が少なくない。上から目線で「やれ」と言われても、助け合いを実践している人たちは動かない。ですから、助け合いをしていただくことを応援しますという姿勢でなくてはいけません。自治体の担当者に説いて回っています。それに対して、保健師さんや看護師さんなど、日頃から住民のなかに入って活動をしている方というのは、よくわかってくれます。

**杉浦** そうした地域に密着して活動をしている方々をサポートしたり、バックアップすることで、世の中はずいぶん変わっていくのでしょうか。そうした方々が気持ちに余裕を持って、ますますやる気になってもらうためにも、遊技業界も支援していかなければなりませんね。

**堀田** 私どもの事業に関連したところで動き出しているのは、自治会ですね。これまで自治会は回覧板を回すだけというように形骸化したところが多かったのですが、いまは1割とまではいきませんが、助け合いのある地域をつくらうということで動き出しています。

**杉浦** 町内会などでも、積極的に取り組んでいるところがありますね。私などは町内会の清掃活動にも参加できないので、寄付ということで勘弁してもらっていますが……。

**堀田** それだって立派な社会奉仕ですよ。結局、つながりがほしいんですよ、みんな。そうしたつながりを満遍なく、しっかり作ることができるのは自治会や町内会などのコミュニティです。



### コミュニティの中心にあるからこそできる社会貢献の形を目指して

**杉浦** コミュニティにおける助け合いやふれあいという観点から見て、遊技業界はどのような役割を果たしていけばいいか、ご教示いただければ幸いです。

**堀田** パチンコ屋さんというのは、実はコミュニティの中心に位置していることが多い。私はAJOSCの会長をさせていただきながら、遊技業の経営者の方々にいろいろ働きかけていました。利益の社会還元ということで寄付などをされている立派な経営者の方々がいらっしゃいますが、それはそれとして続けてもらい、その他にパチンコ店にいらっしゃるお客様から、もうかったときにその1割程度を地域や子どもたちのために寄付してもらうような運動を起ころうと思っていました。そして、その使い道は、地域のお母さん方に決めてもらう。なぜ

かと言えば、結局、地域で一番パチンコを敵視しているのは、母親たちですから。お母さんたちが、子どものためにこうしてほしいというところにお金を使うとなれば、パチンコに対する認識も随分変わってくると思います。

**杉浦** 遊技客の善意を子どもたちのために役立てるという意味では、先ほどお話ししたpp奨学金なども該当する事業だと思います。

**堀田** その通りです。自分が実現できていないことばかり言っていて、恐縮なのですが、もうひとつ考えているのは、パチンコ屋さんには地域のお年寄りの方々が結構、来ていらっしゃいます。その方々がひと休みして、話ができるようなスペースを提供していただければ、そこで絆ができる可能性がある。自分たちの善意が子どもたちのために使われているとわかれば、では、自分たちで子どもの見守り活動をしようかという話に発展するかも

しれないし、誘導の仕方によっては、ボランティア活動に結び付くかもしれない。そうすれば、パチンコ屋さんがコミュニティの中心に位置していることがますます生きてくる。

**杉浦** そうした機能を果たしていくことができれば、遊技業界に対する認識も随分変わってくるでしょうね。また、東日本大震災を機に、災害時に駐車場スペースを緊急車両などのために開放するといったことや、非常食の備蓄・提供といったことに取り組むホールも増えてきました。これなどもホールの立地を生かした社会貢献の一環だと言えます。そうした活動を通じ、地域の信頼を獲得していくためにも、我々にはまだやるべきことがたくさんあるということですね。本日は、大変参考になるお話をたくさん聞かせていただきました。また、これまで会長としてご尽力いただきましたことに、感謝しております。ありがとうございます。

**堀田** こちらこそ、ありがとうございました。AJOSC会長としての今後のご活躍を期待しております。

**堀田力** (ほった・つとむ) さん  
1934年生まれ、京都府出身。弁護士、さわやか福祉財団会長。京都大学法学部卒業後、61年に検事任官。大阪地検・東京地検特捜部検事、法務大臣官房長などを歴任し、91年に退官。同年、さわやか福祉推進センター開設(95年、現財団に改組)。2010年、公益法人化)。「新しいふれあい社会の創造」を掲げ、ボランティア育成などに積極的に取り組むほか、福祉・教育・社会保障分野の団体や組織で理事や委員などを務めている。10～16年にわたり、全日本社会貢献団体機構の会長を務めた。

**杉浦正健** (すぎうら・せいけん) さん  
1934年生まれ、愛知県岡崎市出身。東京大学経済学部卒業後、川崎製鉄勤務を経て、1972年弁護士登録。1986年に衆議院議員初当選。農林水産政務次官、国土政務次官、衆議院法務委員長、外務副大臣、内閣官房副長官を歴任後、2005年第3次小泉改造内閣で法務大臣就任。2009年政界引退。現在、浅沼・杉浦法律事務所主宰、一般財団法人杉浦プラムチャリヤ代表理事、全国青少年教化協議会監事。著書に『あの戦争は何だったのか 歴史の教訓として子や孫に伝えたいこと』(文藝春秋社)などがある。